

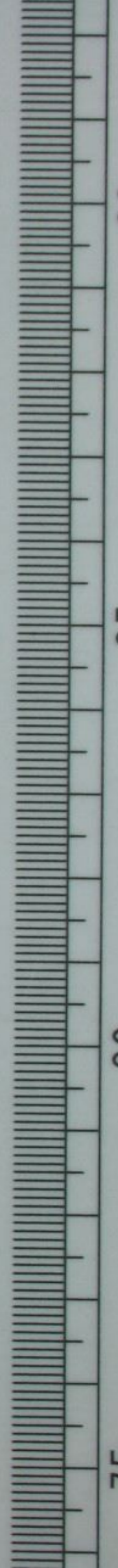


後百載抄

疥疹必用

全

武
13



75

80

85

90

疹麻

七	八	九	十	十一	十二	十三	十四	十五	十六	十七	十八	十九	二十	二十一	二十二	二十三	二十四	二十五	二十六	二十七	二十八	二十九	三十	三十一	三十二	三十三	三十四	三十五	三十六	三十七	三十八	三十九	四十	四十一	四十二	四十三	四十四	四十五	四十六	四十七	四十八	四十九	五十	五十一	五十二	五十三	五十四	五十五	五十六	五十七	五十八	五十九	六十	六十一	六十二	六十三	六十四	六十五	六十六	六十七	六十八	六十九	七十	七十一	七十二	七十三	七十四	七十五	七十六	七十七	七十八	七十九	八十	八十一	八十二	八十三	八十四	八十五	八十六	八十七	八十八	八十九	九十	九十一	九十二	九十三	九十四	九十五	九十六	九十七	九十八	九十九	一百
										朱鳥											持統											大寶																																																													
										元正											養老											元明																																																													
										神龜											天平											和銅																																																													
										聖武											天平											和銅																																																													

續日本紀云九年夏四月癸亥太宰管内諸國
 百姓悉臥不起夏より冬に至るまで
 天下天死するものあり
 續日本紀云七年乙亥八月諸國に疫瘡大を發し
 死者ありて染病おこりぬる海内小流行と名を謀加沙と云ふは瘡瘡の
 めるありと俗に云ふといふ又いふは續日本紀云七年乙亥八月諸國に疫瘡大を發し
 百姓悉臥不起夏より冬に至るまで天下天死するものあり

瘡

六	七	八	九	十	十一	十二	十三	十四	十五	十六	十七	十八	十九	二十	二十一	二十二	二十三	二十四	二十五	二十六	二十七	二十八	二十九	三十	三十一	三十二	三十三	三十四	三十五	三十六	三十七	三十八	三十九	四十	四十一	四十二	四十三	四十四	四十五	四十六	四十七	四十八	四十九	五十	五十一	五十二	五十三	五十四	五十五	五十六	五十七	五十八	五十九	六十	六十一	六十二	六十三	六十四	六十五	六十六	六十七	六十八	六十九	七十	七十一	七十二	七十三	七十四	七十五	七十六	七十七	七十八	七十九	八十	八十一	八十二	八十三	八十四	八十五	八十六	八十七	八十八	八十九	九十	九十一	九十二	九十三	九十四	九十五	九十六	九十七	九十八	九十九	一百
										天											天平											神護											光仁																																																			
										天											神護											景雲											桓武																																																			
										天											神護											景雲											桓武																																																			

あり此年上朝を廢し百官宮人とれを患ふ天下百姓相繼て没死
 する不可勝計是即麻疹也敏達己言り百官自之此間記録無之無可考
 續日本紀云九年庚午十二月辛酉是年秋冬
 京畿男女年三子已下者悉發豌豆瘡臥病

瘡

二	三	四	五	六	七	八	九	十	十一	十二	十三	十四	十五	十六	十七	十八	十九	二十	二十一	二十二	二十三	二十四	二十五	二十六	二十七	二十八	二十九	三十	三十一	三十二	三十三	三十四	三十五	三十六	三十七	三十八	三十九	四十	四十一	四十二	四十三	四十四	四十五	四十六	四十七	四十八	四十九	五十	五十一	五十二	五十三	五十四	五十五	五十六	五十七	五十八	五十九	六十	六十一	六十二	六十三	六十四	六十五	六十六	六十七	六十八	六十九	七十	七十一	七十二	七十三	七十四	七十五	七十六	七十七	七十八	七十九	八十	八十一	八十二	八十三	八十四	八十五	八十六	八十七	八十八	八十九	九十	九十一	九十二	九十三	九十四	九十五	九十六	九十七	九十八	九十九	一百
										天											神護											光仁																																																																		
										天											神護											景雲											桓武																																																							
										天											神護											景雲											桓武																																																							

紀疫瘡と記せし疫癘
 と記し誤之瘡瘡あり
 甲辰帝遷稱徳
 天平神護
 神護
 景雲
 光仁
 宝亀

者多其甚者死天下諸国往々在云天平宝字癸卯り其年目りて是瘡瘡の三度見
 せり必承或は三年或は五年中諸国流行も依之て記すべし
 續日本紀云九年庚午十二月辛酉是年秋冬
 京畿男女年三子已下者悉發豌豆瘡臥病

故小疱瘡ハ此以後流行の年月を記せん
唯麻疹の記之見人をもあらず

七 八 九 十 十一 十二 十三 十四 十五 十六 十七 十八 十九 二十

疹麻

已帝 嗟峨 弘仁 二 三 四 五 甲午流行春より夏より天平九丁より七十八年目之文徳実録其外之記録小疱瘡とあらず

麻疹之疑 六 七 八 九 十 十一 十二 十三 十四 十五 十六 十七 十八 十九 二十

二 三 四 五 六 七 八 九 十 十一 十二 十三 十四 十五 十六 十七 十八 十九 二十

五 六 七 八 九 十 十一 十二 十三 十四 十五 十六 十七 十八 十九 二十

疹麻

文徳 仁壽 二 三 癸酉夏より秋至弘仁并流行より四十年目之日本畧記文徳実録小疱瘡とあらず

天安 二 三 四 五 六 七 八 九 十 十一 十二 十三 十四 十五 十六 十七 十八 十九 二十

土 十一 十二 十三 十四 十五 十六 十七 十八 十九 二十

六 七 八 九 十 十一 十二 十三 十四 十五 十六 十七 十八 十九 二十

五 六 七 八 九 十 十一 十二 十三 十四 十五 十六 十七 十八 十九 二十

云十五年秋天下疱瘡都鄙無一免者天亡之輩盈滿朝野十月天皇有御疱事○日本記畧云十五年冬十月廿六日大赦天下云古史痘麻相混然也疱瘡改元祈禱大赦ホク無之且延暦以後ハ蓋疱瘡餘毒不盡テ諸国流行ハ臣同時ニ害ヲサズ麻疹ハ萬国ニ周流ス故ニ数十年ヲ隔テ多ク海内一般ノ殃ヲ及ス是ヲ以史之所記麻疹ハ国家ノ大事ニシテカニ祈リ大赦ホク有自分明之

瘡瘡

疹麻

二	三	四	五	六	七	八	九	十	十一	十二	十三	十四	十五	十六	十七	十八	十九	二十
天德	天德	天德	天德	天德	天慶	天慶	天慶	天慶	天慶	天慶	天慶	天慶	天慶	天慶	天慶	天慶	天慶	天慶
二	三	四	五	六	七	八	九	十	十一	十二	十三	十四	十五	十六	十七	十八	十九	二十
應和	應和	應和	應和	應和	應和	應和	應和	應和	應和	應和	應和	應和	應和	應和	應和	應和	應和	應和

日本記畧云元年六月晦癸未今月以後瘡瘡多各人庶多傷云云

此流行ハ延喜十五年より三十三年目ノ自夏至冬之依之歲三十以下の男女老若ク是をまのやむ人民多く死キ其瘡如栗如豆とあり又此年麻後ノ赤痢を患ヘ者多シ

疹麻

疹麻

二	三	四	五	六	七	八	九	十	十一	十二	十三	十四	十五	十六	十七	十八	十九	二十
康保	康保	康保	康保	康保	康保	康保	康保	康保	康保	康保	康保	康保	康保	康保	康保	康保	康保	康保
二	三	四	五	六	七	八	九	十	十一	十二	十三	十四	十五	十六	十七	十八	十九	二十
貞元	貞元	貞元	貞元	貞元	貞元	貞元	貞元	貞元	貞元	貞元	貞元	貞元	貞元	貞元	貞元	貞元	貞元	貞元
二	三	四	五	六	七	八	九	十	十一	十二	十三	十四	十五	十六	十七	十八	十九	二十
永祚	永祚	永祚	永祚	永祚	永祚	永祚	永祚	永祚	永祚	永祚	永祚	永祚	永祚	永祚	永祚	永祚	永祚	永祚
二	三	四	五	六	七	八	九	十	十一	十二	十三	十四	十五	十六	十七	十八	十九	二十
正曆	正曆	正曆	正曆	正曆	正曆	正曆	正曆	正曆	正曆	正曆	正曆	正曆	正曆	正曆	正曆	正曆	正曆	正曆
二	三	四	五	六	七	八	九	十	十一	十二	十三	十四	十五	十六	十七	十八	十九	二十
永觀	永觀	永觀	永觀	永觀	永觀	永觀	永觀	永觀	永觀	永觀	永觀	永觀	永觀	永觀	永觀	永觀	永觀	永觀
二	三	四	五	六	七	八	九	十	十一	十二	十三	十四	十五	十六	十七	十八	十九	二十
長德	長德	長德	長德	長德	長德	長德	長德	長德	長德	長德	長德	長德	長德	長德	長德	長德	長德	長德
二	三	四	五	六	七	八	九	十	十一	十二	十三	十四	十五	十六	十七	十八	十九	二十
華山	華山	華山	華山	華山	華山	華山	華山	華山	華山	華山	華山	華山	華山	華山	華山	華山	華山	華山
二	三	四	五	六	七	八	九	十	十一	十二	十三	十四	十五	十六	十七	十八	十九	二十
寬和	寬和	寬和	寬和	寬和	寬和	寬和	寬和	寬和	寬和	寬和	寬和	寬和	寬和	寬和	寬和	寬和	寬和	寬和

甲戌流行自秋至冬天曆元年より共年目之○扶桑畧記云三年八月間瘡瘡の疫あり天下貴賤大死者多シ云云依之祈神大赦賑給の事あり是即麻疹之

不死世謂之赤斑瘡自天子至庶人貴賤老少緇素男女無一免者五年正月改元為長保。依去年赤斑瘡疫也日本記各云四年七月天下衆庶煩瘡瘡世号之稻目瘡。又号赤瘡瘡天下無免此病但前信濃守佐伯公行不患此病○百練抄云四年自夏至冬瘡瘡流行死亡者多。古老未見如今年云○今年流行の記録瘡瘡相混の證據也

長保 二 三 四 五 寬弘 二 三 四 五 六 七 八

辛亥 三條 帝崩 長和 二 三 四 五 帝讓 後一條 寬仁 二 三 四 治安

二 三 萬壽 乙丑流行長德四年自夏至秋季有赤疱瘡

三 四 五 六 七 八 九 後朱雀 長曆 二 三 長久 二 三

四 寬德 乙酉 帝崩 後冷泉 永兼 二 三 四 五 六 七 天喜

二 三 四 五 康平 二 三 四 五 六 七 治曆 二

三 四 後三條 延久 二 三 四 白河 兼保 二 三 兼曆

疹麻

瘡云 二 三 四 永保 二 三 廣德 二 三 丙寅帝 堀河 寬治

疹麻

歲十五赤斑瘡所害也 今年改元依赤疱瘡 二 永長 兼德 二 康和 二 三 四

疹麻

癸巳流行嘉保元年 元年正月近日赤斑瘡流布天下云 五 長治 二 嘉兼 二 鳥羽 天仁 二 天永 二 三 永久

疹麻

二 三 四 癸卯帝 讓位 崇德 天治 二 大治 百練抄云天治三年正月廿二日改元為大治依疱瘡也今丙午流行

疹麻

丁巳流行萬壽二年 斑瘡親王公卿以下逝者多云 又云兼保四年十月十七日改元為兼曆依早魁並赤斑

疹麻

其間至近永元元年より十四年目ありいふありき
 二 二 二 四 五
 天養 久安 二 三 四 五 六
 近衛 康治 二 三 四 五 六
 長美 二 三

下麻人至マテ疱瘡ヲ患シ自夏至秋尤盛
 依之祈神大赦ホの事あり○本朝世紀

疹麻

仁平 二 三 久壽 二 帝崩 後白河 保元 二 三 讓位 戊寅帝 二 條 平治

疹麻

永曆 應保 辛巳流行康治二年より十九年目之百練抄云永曆五年九月曾改元依疱瘡也 二 長寛 二

疹麻

永萬 乙酉 帝崩 六條 仁安 二 三 高倉 嘉應 二 美安 二 三 四

疹麻

安元 乙未流行應保元より十五年目之百練抄云元元年三月五日主上御疱瘡近日天下流行祈神改元ホアリ其期亦近シ然天天下面の流行非疱瘡疹也

疹麻

二 治美 二 三 四 建久 二 三 安徳 養和 壽永 二 後鳥羽 元暦 文治

四年正月朔 主上自一昨日御不豫疱瘡云云○東鑑三年土月若君萬壽御疱瘡此事尊卑遍煩 四 五 六 七 八 九

疹麻

讓位 戊午帝 土御門 正治 二 建仁 二 三 元久 二 建永 丙寅流行建久三年より十五年目之

百練抄云元年正月十日被遣十二社奉幣使依疱瘡御祈也元久三年四月十七日改元為建永依赤斑瘡也五月四日被發遣十二社奉幣使依疱瘡御祈也無疑麻疹有之

疹麻

美元 二 三 四 庚午帝 順徳 建曆 二 建保 二 三 四 五

疹麻

六 美久 二 九條 後堀河 貞應 二 元仁 甲申流行建永元年ヨリ十九年目之百練抄

年

後光明
正保

八
九
十
十一
十二
十三
十四
十五
十六
十七
十八
十九
二十

疹麻

二
三
四
慶安
二
三
萬治
二
三
寬文
二
三
四
五
六
七
八
九
十
十一
十二
十三
十四
十五
十六
十七
十八
十九
二十

後西
明曆

靈元

五
六
七
八
九
十
十一
十二
十三
十四
十五
十六
十七
十八
十九
二十

七
八
天和
二
三
貞享
二
三
延宝
二
三
四
元禄
二
三

疹麻

庚午流行慶安二ヨリ
四十二年目ナリ
辛未二年相續
流行ス本朝年鑑
五
六
七
八
九
十
十一
十二
十三
十四
十五
十六
十七
十八
十九
二十

三
四
五
六
七
八
九
十
十一
十二
十三
十四
十五
十六
十七
十八
十九
二十

疹麻

六
七
中御門
正徳
二
三
四
五
享保
二
三
四
五
六

疹麻

七
八
九
十
十一
十二
十三
十四
十五
十六
十七
十八
十九
二十

庚戌流行宝永五ヨリ二十二年
目之自秋至冬
本朝年鑑

七
八
九
十
十一
十二
十三
十四
十五
十六
十七
十八
十九
二十

櫻町

二
三
四
寛延
二
三
宝暦
二
三
明和
二
三
四

桃園

癸酉流行享保三ヨリ六
四年目之自春至夏

四
五
六
七
八
九
十
十一
十二
十三
十四
十五
十六
十七
十八
十九
二十

仙洞

五
六
七
八
後桃園
安永
二
三
四
五
天明
二
三
四
五
六

丙申流行宝暦三ヨリ九四年
目之自春至夏家治公日光

御社系の年之其年ハ諸國
死亡人多ク危急之症多
六
七
八
九
仙洞
天明
二
三
四
五
六

疹麻

三

七八 寛政 三三四五五六七八九十十一十二

享和 二 三 癸亥流行安永五ヨリ二十八年目之自仲春至仲秋此年の麻疹の

或ハ疔瘡又ハ癩瘰癧ヲ發シ或ハ目ヲ入ル豆ノ叶或ハ腰の廻リハ惡瘡を發シ又ハ

生涯片論云々ト如クテ人々之を驚カシム既而時ニあるは年三十條比の男女の首

人ハ多ク享和三年の麻疹下ノキ輩ニ在重ナル條毒トクテ瘡キハ多ク餘毒

多ク由リ生ズルハ又痛後毒のゆゑセヨリ輩ニ在るは麻疹のハ禁物性也ト云

下ノ麻疹食物ト云ハ 并テ用ルハ事ハ別ニ云ハク

十五 十二 十三 十四 文化 二 三 四 五 六 七 八 九 文政 二 三 四 五 六 七

面部部形圖

○麻疹ハ天庭司空印堂
年壽ノ出ヅルものハ輕シ
○麻疹ハ陽部ノ多キを
吉兆トシテ陽部トハ頭
面手足外ヅルハ皆陽
也及ヒテハ下リ及ヒテ
足トシテハ下リ及ヒテ
陰部ノ少キハ耳ノ陰部ハ
即チ不透トモ可無慮



面部部形圖

芝真紅潤之色之圖

○麻の色は紅く潤ふを貴び
 形ハ尖聳と貴ぶ
 ○麻ハ稠密縫ありき
 在古兆とせし
 ○其色白あつて不分明
 内地唯點粒の高低
 聳一日一夜み波もの
 あり是ハ邪熱ガ本輕ま
 免も角も表へより透齊ガ肝要



黒晦如煤之圖

○其色黒晦みし煤の
 如もの重一〇又一種ハ
 扁潤ガ吹赤んて塊
 在成塊の上よ又
 小粒ガ多ク平漏て
 不起あつと一風
 毒のめく偏高紅ふ
 腫て但頭粒大なるもの
 透ハされども此ホの類ハ重



黒黯乾枯稠密之圖



○黒黯乾枯稠密のものの

丸重一然其の中

二三尖聳光注

あるまて元氣有

○頂粒焦乾紫赤

○頂粒大にしては濃血

出腥臭く乾うざるとある

麻疹必用

麻疹

一麻疹の俗もなりりとの麻とハ麻子も似るを以て
 又名つく疹とそく語とりり行のこちて肌膚の小疹
 ありけ外麻疹の異名移るあるとまよあるとりて詳之
 入門云六腑腸胃の熱肺をむきて外感内傷併せ發
 疱瘡と表の回きふ似て裏の實は異なり初て起る時
 全く傷寒の類を望み面赤く中指冷るを異ありとす
 るのこ又曰瘧疹とお似り又發斑とお似り但發斑は斑

逆の如く空缺の石あり雲の状の如く麻疹の即麻の
小の如く遍身空を著く但疎密同くかざらぬの如く仍
て斑を夾み丹を夾む同く出るものあり○麻疹乃
發生せしむ初めの腹脇腋内股より出ん次は面背脊
より及外面より出る也麻疹の陽病の流之疱瘡陰病
之故は漿より膿を成らぬを成る發生面疹より也
是陰病の流之故は温補裏裏の薬を与ふべし
陽病なるは漿膿ありを中氣より屬する後を以て
寒涼疎散の方を先とす生後調ゆるべき也

一ち初め發熱の時傷寒より似て熱をけりて痛下り
唯咳嗽志なりあり聲啞く如く口乾き咽痛唇
焦れ湯水を好む或は血出鼻より又は清涙出頻り
噴嚏し眼胞腫淡なるれ面腫臃赤く發熱二三日
ありて身痒皮の中はききあるも出せぬの如くは
の如く或は粟粒の如く出後熱退き三日一日或は
一日中又二三日ありて收るものなり病中して薬を
服するより及行の如くは風多しあり飲食性
あり然れは發熱勿れ危きと疱瘡より甚し

用つる。きこもあつて
 一重の麻疹と云ふ標は病人の西の耳の根よりはらきり
 頸項背脊下へ腰の骨を結くまで下へ必び二ツ三ツ或
 は七ツの紅点も之此紅点が即麻疹の報標なり
 赤伴のぬき病ありても此紅点あるきなり。うまあつて
 結くまで下へ又たの目下まで下へ人ときる時
 目を斜めしてこれをなれば皮膚も腫くしててを
 むもひてあつたが肌肉のつぶれくとして疥瘡の
 めくも丹のぬき。以面も多きと必病と云ふ。

一麻疹近と云ふ病は
 赤あつて赤あつても
 赤肉のそじをさす
 して清浄なまき
 又赤肉をさすひあき
 きのを煮焼して食ふべ
 う。○その時赤肉を
 煮て清浄なまき
 瘡。麻疹。疫病。痢病。
 赤い清浄潔白くして
 瘡をんかす。赤あつて
 き丸の赤し。疑ひは



115

麻疹を際へてある時は
 赤い点の香を樹皮を
 其疹せぬ強の衣を
 洗むべし此れは
 〇婦人月々の穢
 を忌むべし〇麻疹の肉
 まさあつて毒を焚くと
 やむべし〇衣の包ひ
 袋のむすべし〇あつ瘡を
 けし身をいむ〇蚊をよき
 蚊をよき油や痛風を
 吹ける身をも〇あつ瘡
 の戸衝をいひしきれん
 目あつてを忌むべし



一ちりりの稠密をきこるものきを吉兆とて古人云疱瘡
 を稀なるをきこるものきを吉兆とて古人云疱瘡
 一は謂之又あつて軽きもの稀疎なり〇紅くはくたきも
 まるも稀とも軽きものきこるもの紅くはくたきも
 夾するを疎の吹疹とせらる〇ちりりのきこる潤ひも
 をよし〇ちりりの尖疹をよし〇ちりりのきこる白死
 みの肉化分るべし〇粒のきこるきこる物物の軽きあり
 一日一夜まで洗ふ〇ちりりの腹より出始るを吹とす
 〇麻の尖大細小を問とせらるれば必じん表へ透あがせ

まれば後の患ひあり ○初發熱甚あしく明後夜より
 うひ牙より出るの吐之 ○初起の時眼光水の如く膝涙多く或
 と白睛微紅する此正候之 ○發熱三日より漸く出
 るものあり ○初起は微汗あると吐之 ○初起は微血
 吐るものあり ○初起は大便溏なるものあり ○初起は
 渴するものあり ○吐之は面より多く出るあり
 ○吐之は口より出るあり ○吐之は逆之 △吐之は出て血
 ちほるものあり △吐之は紫なるものあり或煤色の如き

年廿五

△小便不利を尋る △大便自り利して不共凶之
 △咽腫不食のものを尋る △口氣を尋る 例へば牙の
 ざるもの、不治之 △吐之は夜出るものあり 乾枯逆も
 の、不治之 △牙疳とて尋る腐爛もの、不治之 △鼻扇目を尋る
 神ろりきを尋るもの、不治之 △鼻を尋る 毒無きもの、不治之
 以外に逆治不治の症牧奉るもの、喉非が重病とて良医に託し
 麻疹の五忌
 一、汚穢を浄するのむ衣衣を汚濁するもの、肉を
 掃除し 沅檀名香をたき一切を清むべし 俗徒巫女のふ

年廿五

をせすともいむ又病人の側より怒りのをせす喧嘩に論せし
かたのせはむ一病人の火毒を盛よとていふ
二より葷腥を冷風寒をいむ是ハ五辛韭蒜葱心薤山蒜
もそのたぐひ魚鳥の肉れ水果生梅桃李柿柚金橘栗李
お希酸氣のまもの三豆一物一も薬妙たものいむ
又一より出せしむるにせしむるをせむとせむるをせむ
だのいびぬも湯をせむるにせむるのいむ一又發熱
の時せしむるをせむるにせむるのいむ一又發熱
のせしむるにせむるのいむ一

三よりせしむるの初め發熱の時ハ寒涼の薬を用うと
をせしむ又温補の薬を用うと一いび發表をせむとていふ
是ハ老の論をいむるをせしむるにせむるのいむ一老
医をたのむ服薬をいふ一○麻疹をいふ安永五年に流行
してをいふ後八年に於て享和三年に流行してをいふ後文政七年に
於てをいふ同くをいふが年二十歳の医師ハ八歳九歳の時より
をいふるにせむるのいむるをいふるにせむるのいむる
一ハ十七年の老医ハ麻ハ僅ハ両夜もいけたるをいふ一瘡癩を
いふ連年ある病をいふるをいふるをいふるをいふる

して汗を止むと云う一と云うの初めは汗を止むと云う
 一と云うの疱瘡より一と云うの甚だ太甚な瘡を似たり瘡を養生
 護潤ありれば其は立止るある疱瘡は日数を経て
 後は愈じたりと云うあるの中は愈むるもの之必は
 是の如くび身より外より瘡をあると云う禁一内は飲食を
 禁むべきに瘡をある十日を経て禁忌の物を止むべき
 一七日又百日と云う一麻疹は好物禁物未だ瘡を
 一麻疹瘡を止めて日数の多寡内は風呂を入るべきを
 一華中風の如く一と云う死一と云う華先の草和の皮予多

是をいふより男女此世をわたくし切之麻疹は瘡を止む
 一と云う瘡を三日と云うは風疹の外よりと云う物ハ瘡ハ内
 陥より或は瘡ハ酸收物を食して一日中日のらま
 一と云う瘡を圓形の瘡を食して一日中日のらま
 一と云う危候をあるもの一と云う浸しと云うとも肌膚は瘡を
 一と云う浸しぬれぬれと云うは瘡を透しと云うを需む一と云う
 一と云う日数をあるもの一と云う瘡をあるもの一と云う物ハ
 一と云う瘡を減ましめてあると云う瘡を減ましめて一と云う核
 一と云う瘡を減ましめてあると云う瘡を減ましめて一と云う核

○麻疹後後遍身搔痒其の風もあつてそのあきこそは毒
 を医よ任よべー ○ちいふ聲かきかへん病之疱瘡の瘡りあ
 ー ○ちいふ初起は血のせらるるれとも又あつても血の止
 ざらへあーいせも毒よべー ○ちいふはよりほつと二便便
 秘はつとちいふとちいふー ○ちいふの痢もは熱病の内陷
 するもは後へは後後病病するものありとちいふ毒よべー
 ○ちいふ初起は向耐れ力佳つうれ睡眠してさあざらへ逆之
 け外は毒よあつとちいふ毒よべー 良医よ託よべー
 一 妊娠のちいふはちいふち切之熱もあつとちいふ毒よべー 胎一陽

一冊

故に古人は妊娠と老羸の人のちいふをむりくとすは
 其ちろくは妊娠は其胎よけたのちちいふれとも熱氣
 大壯るればやとちいふたのちちいふて墮胎するは既之又あり月
 あれば血を産するもちいふたのちちいふれとも麻疹の発熱よ
 つて出産するも血を産するも逆よを既は産婦の側乃
 ちいふも音も血のたが産するものなるも切ん況やちいふ
 大熱は熱もかめく打権めくの苦もなれば血のおきまする
 だきやちいふ一依之名医妊娠のちいふのちいふ苦も一と
 めあて移るの奇方を考あつとちいふ年ちいふは麻疹

三十一

西夜流りもあつて例にらるる妊婦老勞の毒多く死せり出ま
の子い歩狎るもの多し麻疹の疱瘡と云ふは二十一年或は三
十年を隔て流りたる也急子中身の輩に医者も後酒人
と云ふれざるもの多しあつても般と治せざる人稀あり
一より流りも遅速ありと云ふり出て三日を過ると收りあり
はあつたりと收りあり又又や白くして漸く没るものあり是
其人の性かまらるる也かしの書も西北の地へ水土剛勁
人のむまれつる厚あつてと云ふりの透表も速し東南の
くと風氣柔弱しと云ふりの出るも遅しと云ふべき也

一と云ふのは小疹を發するものあり是は生れ出ても洗
治せらるる甚しきものありと云ふは肌腠へ留泊して毒
を發せらるる荆防艾葉の煎湯を以て洗ふべし

麻疹異名

唐以上。傷寒斑瘡。天行發斑。溫病發斑。溫毒發斑。景岳
全書云。痘疹も在る。沙子といひ。浙いも在る。醋子といひ。山
も在る。膚瘡。赤瘡といひ。北毒も在る。疹子といひ。又糠瘡。
瘰瘡。○本邦もて古書に。麻子瘡。赤斑瘡。斑瘡。赤疹。赤疱
瘡。榴目瘡。亞加謨加沙。巴斯加。意納速利。ちとの名あり

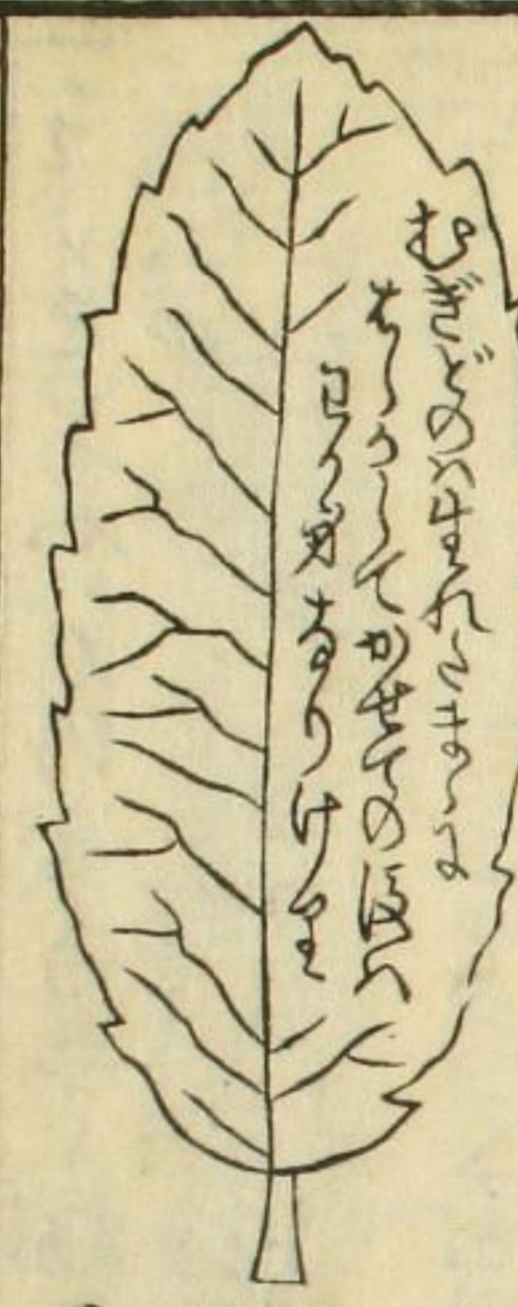
一麻疹の欽明十三年は星國より傳來し一疱瘡より百八十二年先
 之令文政七年と凡千二百七十二年の間乃麻疹流行の年
 月時蹟はくらくくその年代記は有るをみるべし

麻疹をまんとする時頭め用心の妙方

一麻疹をまんとする時法はまきまきするべし一は家内を掃除
 て衣服玉物を洗濯淨する一たの葉を以て焚く
 たをれはは病をのぞくとするは病を交ると怪し
 蒼木 細辛 乳香 降真 川芎 各半分
 右各細よきまき家内を焚く董てす

○又方 薑陸 雄黄 鬱金 茵陳 神代松節
 右ホ分細末にして蜜よて煉かす一塩を少く入合せ
 焚く一但麻疹をうつて及ば焚くべし

○又方多羅葉とよ木の葉を採た通りのまきお
 書せ人の年と姓をまきお物をもまきおへ流せ



けあをかくてかすか
 あできをうて流せ
 まきおのまき
 まきおのまき

痲疹食してよきもの

- 味漿
- 牛蒡
- 白瓜
- 枸杞苗
- 豆王豆
- 砂糖
- 干豆腐
- 右つれとまき物
- 一 梨油
- 一 鴨活
- 一 冬瓜
- 一 薯蕷
- 一 葛粉
- 一 白雪糕
- 一 款冬
- 一 菜菔
- 一 瓢蓄
- 一 又加苗
- 一 绿豆
- 一 かつくり
- 一 石決明
- 一 胡荽苗
- 一 淡んきげ
- 一 蒲公英
- 一 赤小豆
- 一 乾鯉
- 一 かつりき
- 一 かつりき
- 一 かつりき

けりも食してよき物とてさるる日殺さぬとて世々
 与ふぞのしん美病人強ふ好む物ありて医師より

禁忌の物

- 醋
- 大禁
- 一 酒
- 一 焼酒
- 一 金柑
- 一 栗
- 一 梨
- 一 薔
- 一 ひん
- 一 瓜
- 一 生梅
- 一 枇杷
- 一 竹の子
- 一 葱
- 一 胡椒
- 一 蜜柑
- 一 蜜柑
- 一 杏子
- 一 李子
- 一 胡瓜
- 一 西瓜
- 一 蒟蒻
- 一 炒豆
- 一 九草母

年あり或は初めは世并終り申は下り世并無愛なるま
ひしく危難多き年ありいまのり忠考ふるべし且幼
雅の事いふも淫く大人にまきもの多し一も令く幼少の
もの皮膚柔うめく発出もあまも也之大人は皮膚厚
きゆあふ発出も多しといふ説あれまもまもよぬ振いづれ
まも病をぬれ日敷通うあいのき熱病をぬれ日敷より
はるく之予も教百人の痘をさるふ少長は限らば生れぬ
是向より一也又初めよりむらゝくあふる良医を採り

ナ五

て終つたむだり一必びゆめせよまきまき

痘瘡の異名

一其始め志き豆をさるて斑といひ一四二四は顆粒をさるを痲瘡
といひ四五日ふり形ち豆に似るとして痘瘡といひ又生れざると
天より受くるものぞて天瘡といひ又天の氣も感して發せるとて天
花といひ四節の期正しきよ変化側りかきこて聖瘡といひ虜國
より傳来せるともて虜瘡といひ又豌豆瘡百歲瘡又和名謨加
沙又意謨といふ

痘瘡戒の事

ナ六

疱瘡を看法

一稀疎 一凹整 一輕鬆 一尖聳
 一凸起 一如珠 一如粟而肥滿
 右ハ吉兆也
 一稠密 一瑣屑 一壅滯 一平塌
 一陷下如斃 一如疥 一如蝨種
 一如火刺 一如蚤斑蚊点
 右ハ凶兆也
 一痘色ハ 一紅活 一蒼老 一光澤



一紅白兩分 一紅如桃花 一白如蠟色
 右ハ色ノトキ也

一慘暗 一焦枯 一嬌嫩 一毛刺
 也

一灰白不明 一氣瀧 一赤過紫
 一老之如白 一幼之如黑紫

一青藍 右ハ色アリト凶兆也

一五之果て 一勃々として肥大顔
 一浮腫 一赤眼胞 一腫目開き 一
 一便がく小便 一便がく小便



一痘瘡軽重せず風寒を結いし穢邪を思ひし肝要之
 一痘瘡のやそと妙薬兜淋二角。サフラン。テリヤカ。のれ容易よ
 用ひてつらびぬ。又用を思ひし良医。相談の上用ひたり。其
 痘の逆さても素人よそわたりかたのあれゆるかせよとて
 一痘瘡の婦人強力の穢邪を産婦の穢邪を大よむ乳母傍人
 ホたの用ひたり。又包ひ袋おをいむ。一
 一佛陀巫祝祓宜山伏の事と臥床入るを忌む其外喪服墓
 不線香抹香あは觸を忌む人をもいむ。一
 一沈香蒼朮艾葉松鳳尾焦中を焚べり。又治者弱子

魚のれ焼臭氣をいむ。○痘瘡の軽重をいむ始より十二
 日の百種をいむ。又穢邪を結いし置し
 襪より風寒の入りをも忌む。又むきまを忌む。炬燵よてあしめ
 置たり。一ば透風を結いし。一
 一三五歳の小兒痘瘡をいむ。むり外へ出たり。外へ
 抱かして出たり。臥床よて忌む。又穢邪を結いし置し。一
 よしき痘瘡の陰病を忌む。静まるるを肝要とす。傍人負ひ
 ぬきて躁せしむ。又躁せしむ。又躁せしむ。又躁せしむ。一
 一疫癘痘とてあしめ。一痘瘡一種あり。往く生痘

をとらふよきやく凶逆の病に依り牢獄の近石の墓石茶毗
 場糞溜厩塵塚野山流まざる水也猿人宿ホ人の君集志
 て汗臭きおあどへの痘瘡おの由を根よ連立ひごりび
 一痘瘡あふ荊艾茵蔯大事を董せりしとひけを焚い
 釋と海をさけ痘の痒をせりし妙之荊艾なるりし
 一人の痘瘡は皮膚厚く常に心気を勞し酒肉を脱すま
 しく且淫事溺き心腎虚耗するを知らざるを發表し瘡ひあ
 く起灌ららあらざるもの多し甲乙の附とありし
 一婦人の痘瘡天氣通下後そのの必は痘瘡中

(十九)

瘡ひあふもの之利らるる一 起發灌膿よかるその所水
 才もあふ出痘色白くあり或は凶逆の病起りし利らるるし
 一孕婦の痘瘡胎の墮らやよも尚もりかやするは
 四のりよ胎墮するもの治療ありし灌膿の時胎
 墮するものむらうし血熱を何ぶんき君の病に
 補をせりしとすを其の良医に託むる
 穢氣不浄を治る事
 一傍尼比丘稱眞山伏巫女なるを房内に入る事なれ
 一父母傍人痘人の側者大音大矣は冥冥物為瘡を忌む

(二十)

一人を志する宣毒口海に痘者よ安んずるなり
 一痘者よ向し變化せしめて入るるをたれ
 一狐臭ある人をいむ○方肉を海にせよとせしめ
 一人を志する方よりせよとせしめて汗の臭をきりて
 一婦人伝ふ彩彦の禱を忌む○溝雪隠を洗ふ臭を忌む
 一髪を焼く髪を焼く或は油灯燭燭紙燭を消す臭を忌む
 一硫黄麝香龍腦を掛香と忌む○火葬臭氣をいむ
 一多臭を焼く或は塩着を焼く或は油をいむ臭氣をいむ
 一胡葱薤蒜野蒜薤青葱のたの臭氣をいむ

（一）

痘瘡の定日

一痘瘡の化の病ひとまじり僅十二日を限るとして其十二日を
 又四つよりしてとせよ四節とす先出疹を三日を**魁点**と
 いふ日の二日を**起脹**といふ又三日の二日を**灌膿**といふ
 膿をのち三日の二日を**収膿**といふ功を収むるなり
 されどそのあとの**落痂**三日といふものあり都合十
 五日をて痘の定期とせよ初発の起るも有短
 きもありいづれ三日といふて熱さめて出疹を必症とす熱
 のつよき中よるものありて痘瘡の餘毒も定期あり

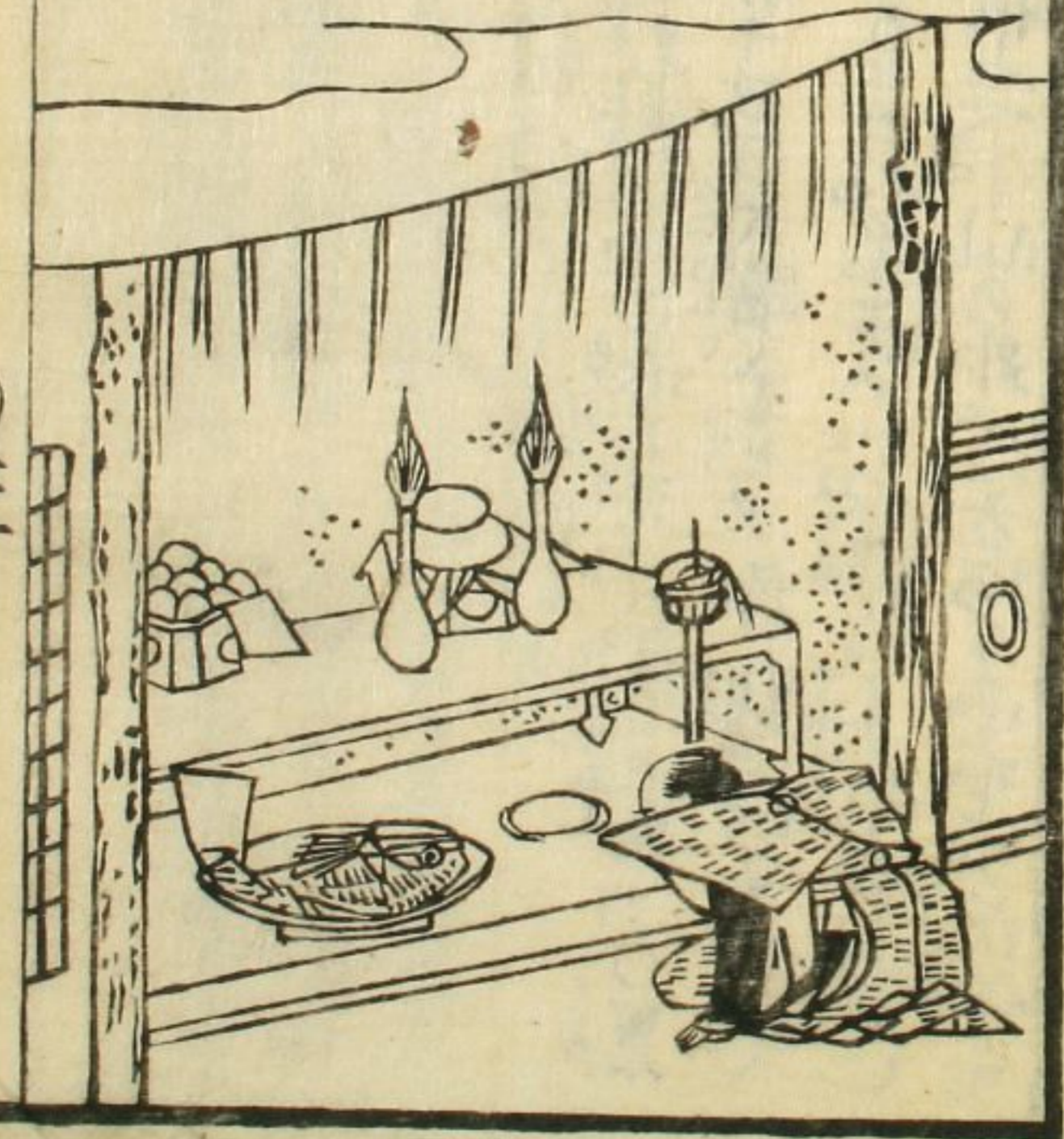
（二）

痘瘡神を祭の式

一痘神を祭は清土までいふ方なり
 赤き色は紅の色を菊もあはれ
 色もあはれてあり貴びあはれ
 此色を用之。赤は又住連
 をとり肉を清の神棚に
 木の風俗は随ひ設る
 一備物も紅色の物を以てす
 ○紅菓子 ○赤小豆飯 ○赤鯛



○わがわがの如きものあり
 ○酒德利は紅紙を口をわがり
 ○常世の道切を清浄ま
 一漢土の五花五聖として五神を祭
 とふ 日本も住吉大明神
 又出雲大社の末社
 鷲森明神也ともいふ
 痘疹の邪氣を防ぐ御神也



角鴟ツノウミづく陰鳥之
 頭目猫ウシロメネコのどく毛角ウシノツノ而耳ミミあり
 昼伏夜出聲老人のどく物乎が
 ぞく後笑ウシロシに此方を痘瘡の
 家ウチの物モノを邪氣ヤキを除き餘毒
 の患ウレをすス一ヒトの生ナマ物モノありし時を
 羽ウエもててテ是コノ焼ヤキもてて其傍ソノに
 置オケべし能スれ氣キをすスて痘
 瘡ウソを解トクるると奇妙キミョウあり



杜鵑トクのどく色黄キナアキく口赤アカく
 小冠コカ冠あり首夏ウツナも散チるるりけ
 るる痘瘡ウソの赤アカは釘置クワシに換カ邪ヤ
 を防マぐてあアくクのけ物モノありし時
 是コノ燒ヤキ又ハ拍ヒもてて其側ソノに置オけし
 又け羽ウエを一枚味噌シ菜油サイアブの交マり
 するス加カ置オけケぬヌえ正味マシの
 赤アカくと奇妙キミョウあり



兎うさぎのあたま前まへ足あし短みじかく尻しりは九ここのの孔あなあり
 毒どく有りあり獵う月つき言ことふ兎うさぎをどうして瘡かさあ
 り食たむとつ時ときは出で瘡かさ稀まかといふ又また預あ
 め瘡かさを怪あやしくする某た兎うさぎ血ち丸まる兎うさぎ紅べに
 丸まるあり又また兎うさぎの足あしを瘡かさの痒かゆ
 みを接あれればかゆみやむとあえ
 又また兎うさぎを飼か置おふと瘡かさのそ
 き女の首くびをさす



文政七年甲申正月

書林

京都 同 大坂 江戸 同 同

勝村治右衛門
 植村藤右衛門
 秋田屋太右衛門
 須原屋佐助
 須原屋伊八
 須原屋茂兵衛



令

